推理小説

被害者は誰だ

邱永漢

光文社

はぐれだ

野永漢

光文社

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思いますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。ご職業、年齢などもお書きそえください。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

昭和三十五年七月二十五日　印刷
昭和三十五年八月　一　日　初版発行

推理小説　被害者は誰だ

著者　邱永漢（きゅう えいかん）
東京都目黒区平町一八

発行者　神吉晴夫
印刷者　盛英信
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区関口町一四〇

発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚（941）一一〇〇—九
振替東京一一五三四七

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

© Eikan Kyû 1960

目次

被害者は誰だ……五
懲役五年……四五
麻薬王……八一
恐喝者……一〇九
視線と刃物……一五一
教祖と泥棒……一九一
あとがき……二二九

裝

丁

真

鍋

博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

推理小説

被害者は誰だ

被害者は誰だ

1

探偵小説に夢中になるような人間にロクな者はいない——と町子は思っていた。なぜならば彼女の連れ合いの篠原史郎は大の探偵小説好きだったからである。

探偵小説好きにもいろいろ種類があると彼女に説ききかせてもそれは無駄というものである。狭い彼女の体験から割り出したところによると、探偵小説好きには二種類の人間しかいないからである。

一種類は探偵小説を読みながら、犯人が尻尾をつかまれることに、じだんだを踏み、何てバカな奴だろうと軽蔑しながら、いかにして完全犯罪をやるかばかり考えている犯人型、もう一種類はせっかく犯人が苦心して迷宮入りをさせた事件をあちこち壁にぶっつかりながらも、何とかして解明しようとして愚かにもエネルギーを消耗する刑事型である。

世の中の大部分の探偵小説愛好家はそのどちらでもなく、たいていは常識のある紳士か淑女かなのだが、あいにくと彼女のまわりには見たくてもそんな人間はひとりもいないのである。彼女ともっとも親しくしている近所の洋品屋の小母さんにしても人柄も常識も円満だが、探偵小説の愛好家ではないし、彼女の良人の経営している映画館にかかったスリラー映画を、タダで見せてやると言っても、血圧が高くなるからと言って決して出てこようとしない。ところが篠原ときたら、東京から映画を仕入れてくる時も、わざわざ雨の降っているような古ぼけたアメリカのスリラー物ばかり選んでくるのである。

「そんなものおよしなさいよ。この町の人はスリラーなんかよりも母物の方が好きなんだから。」

何回となく彼女は良人に意見をしたものである。しかし、篠原の返事はいつもきまっていた。
「仕事のことに女はよけいな口を出すな。」
「そりゃ私だって口は出したくないわよ。」と彼女も負けてはいなかった。「でも小屋の入りはどうなの？　あれじゃ使っている人たちのお給料も払えないじゃありませんか？」
「入りなんかどうだっていいんだ。だいたい、母物なんて、アレは目薬をさして泣いているんだぜ。わざわざ金を払って貰い泣きをしにくる奴の気が知れん。」
今日ならスリラー物ブームで、残酷な話ほど人気があるが、何しろこれは終戦後、四、五年目の話である。人びとは食って行くためにアクセクしていたし、世の中はそのままですでに十分残酷だった。今さら、残酷の上塗りをして楽しむだけの精神的余裕はなかったのである。
そのころ、篠原が洋画専門の小っぽけな小屋を経営していたのは、都下も神奈川に近いH町というところである。駐留軍の町でこそなかったが、キャンプにはそんなに遠くなかったし、治安のしっかりしている都心部とはいくらか距離があったので、都心部で食いつめた連中がなだれこんでいた。パンパンは町に溢れているし、ヤミ物資の取引は盛んだし、喧嘩は絶えたことがない。映画館の便所の鏡などは何回入れなおしてもすぐ盗まれてしまうので、しまいには剥がれたままにしておくといった調子である。
町子は町のこんな雰囲気が好きでなかった。ボロ小屋であったけれども、売れば何がしかのまとまった金が手にはいるので、できることなら今のうちに見切りをつけて、どこかもっと平和なところへ移って暮らしたかった。
けれども篠原の考えはちょうどその逆である。彼はこの雰囲気を愛していたし、映画館の内と外とが

まるで夜と昼がつながっているように同じ雰囲気の中でつながっているのがえらく気に入っていた。

もとをいえば、篠原は数年前にどこからともなくこの町にまぎれこんできた男である。映画館の暗がりの中で、いきなり手を握って町子と知合いになった。自分では九州の生まれで、戦後、外地から引きあげてきたのだと自称していたが、言葉にはときどき妙な訛りがあったし、町に住んでいる第三国人たちともつきあいがあった。篠原自身が第三国人じゃないかしらと、町子は何度も疑ってみたことがある。

二人が一緒になった時、篠原はかなりまとまった金を持っていた。それがどこからきたものか町子はきいてみたことがなかったが、おおよその見当はついていた。陳さんとか李さんとか、この町で砂糖やアメリカ製品を取扱っている第三国人とグルになって稼いだものなのである。

「そんな危ない綱渡りはおやめなさいよ。もうこれだけお金があったら、カタギの商売をやっても立派に暮らして行けるじゃないの。」

あのころは一緒になり立てだったから、篠原は今よりは町子のいうことをきいた。

「カタギの商売ってどういうものだい？」

「うしろ暗い思いをしないですむ商売のことよ。それこそおしるこ屋だって、おそば屋だって何だっていいわ。」

「それじゃ映画館はどうだい。」と篠原はききかえした。「今、駅のそばの映画館を買わないかと言われているんだがね。」

「映画館ならいいわ。」と町子は即座に賛成した。「映画館を持っていたら、映画を見るのにお金を出さないですむものね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おまえはバカだな。」
と篠原は笑った。
「菓子屋をひらけば菓子なんぞ見るだけでイヤになるものだよ。」
そうは言ったものの篠原は町子を連れてすぐ映画館の売物を見に行った。売りに出されるだけあって小屋という言葉がピッタリするような貧弱な建物だったが、町子は篠原がこれからちゃんとした定職をもってくれるのだと思うととても嬉しかった。篠原は百万円の言い値を七十万円に値切り、かれこれ五十万円かけてどうやら見られる小屋に改造し、名前もオリオン座と外国風に改めた。
しかし、「おまえはバカだな」と笑われたのもあたり前だとまもなく町子は気づいた。映画をタダで見るのが珍しいのは最初のうちだけで、しばらくするとタダの映画は見るのも嫌になったからである。そればかりでない、映画館はカタギのやる商売とは、ちょうど裏腹だった。だいたい、映画館は町のあんちゃんや遊び人のタマリのようなところである。篠原が館主になっても、むかしの友だちは相変わらず離れなかったし、その上に町のあんちゃんたちが取巻きになった。彼らはタダで時間を潰す場所を提供してくれる代償として、篠原を「オヤジさん」と呼んだのである。だから映画館の中にはいつも若い遊び人風の男がゴロゴロしていたが、映画館のあがりは見かけほどではなかった。
一度こんなことがあった。H町のはずれの洋服屋に、強盗がはいって洋服屋の主人を殺したのである。その時、警察では町に住む第三国人の仕業だと睨み、ヤミ屋をやっている李さんを有力な容疑者として留置した。それをきいた篠原は、自分で警察へとんで行った。
「君は何者だね？」
警察署の本橋刑事は、いぶかしげな目つきでこの不意の闖入者を眺めた。

「オリオン座の篠原です。」
「で、用件は？」
「李さんは強盗をやるような奴じゃありませんよ。それを言いに来たのです。」
「フン。」
と刑事は鼻先で笑った。
「シロウトが口を出す筋合いのことではないな。」
「僕は李さんを知っていますが、強盗をするほど貧乏はしていません。まあ、あまり人相のいい方じゃありませんがね。」
「しかし、アリバイがないんだぜ。」と本橋刑事は言った。「家にいたと女房が嘘をついたが、すぐバレてしまったからな。」
李さんのアリバイは一週間目になってからやっと成立した。もっとも、そのために彼は夫婦別れをする羽目におちいってしまった。なぜならば、その時間に彼が隠し女の家にいたことが女房にバレてしまったからである。
李さんは無事釈放されたが、警察では相変わらず第三国人の仕業だと睨むことをやめようとしなかった。篠原はそうした警察の態度に一種義憤のようなものを感じた。
この町には第三国人は数えるほどしか住んでいない。みな、何らかの意味でヤミ商売とつながりを持っているが、それなりに生活は安定している。ヤミ商売をやるような人間はだいたいが利口者だから、人を殺すような下手な真似はやらないという一種の信念のごときものが篠原の頭の中にはある。
一つには警察の鼻を明かしてやろうという気持からであるが、篠原は自分なりに実地検証をはじめ

た。出入りの不良どもを動員して聞込みをやったりもした。
「何だっておれたちの仕事の邪魔をするんだね？」
ある日、本橋刑事が劇場へやってきて、いきなりぶしつけな質問を浴びせた。
「お手伝いをしているのですよ。」と篠原が言うと、
「フン。」と刑事はまた鼻先で笑った。刑事はシロウトに自分の縄張りを荒らされることがあまり愉快でないらしい。しかし、篠原がポケットからたばこを出してすすめると、一本抜きとって、自分から事務室の椅子にすわりこんだ。
「あなたの考えでは、犯人の見当はどうだね？」
「この土地の者ではないようですね。」
「どうしてそういうことがわかる？」
「そりゃわかりますよ。」
と篠原は自信ありげに笑って見せた。
「この土地のナラズ者ならば、かならず僕の張ったレーダーにひっかかってくるはずですからね。誰の金まわりが急によくなったとか、誰の挙動がこのごろ変だとか、たいていのことはわかりますよ。」
「そうかね。まあ、金のある連中の仕業ではないことだけは確かなようだがね。」
皮肉ともつかぬ捨ゼリフを残して本橋刑事は帰って行った。
ところがこの事件はまもなく落着した。犯人は篠原の予想したように、この土地の者ではなく、蒲田から買出しに来た男だった。
篠原が本橋刑事と懇意になったのは、功名がどちらのものでもなかったことからはじまったと言っ

ていいかもしれない。本橋刑事は自分のメンツを失うことなしに篠原をカンのいい男だと賞めることができたし、篠原は篠原で、十年以上もこの道で飯を食ってきた本職からカンがいいとおだてられて得意でないこともなかった。

彼の探偵型スリラー狂がはじまったのはこの時からである。今までカストリ雑誌しか転がっていなかった家の中がしだいに探偵本で埋まるようになった。夢中になると、トコトンまで行かねば気のすまない性格と見えて、商売の面にまでそれが現われたのである。

オリオン座がスリラー専門館になってから一番被害をこおむったのは町子であった。営業不振のために持出しが多くなった上に、従業員の苦情が、みな町子の方へまわってきたからである。

「ね、あなた。」と、たまりかねて町子は言った。「少しは私や泰雄のことも考えてくださらなくては困るわ。」

「考えていないとでもいうのか。」

新聞の三面記事に気をとられていた篠原は顔をあげると不機嫌そうに言った。

「べつにおまえたちに、ひもじい思いをさせていないじゃないか。」

「ひもじい思いをさせていないって?」

なるほど泰雄のミルク代に困るような段階にはまだ到達していなかった。しかし、このままの形ですすめば、やがてそうなる日が来るに違いないと町子は信じている。

「あなたは家にいても、いないのとまったく同じだわ。これもみな探偵小説のおかげよ。家じゅうの本を一冊残らず焼いてやるから。」

「焼いてみろ。」

と篠原は言った。
「出版屋が喜ぶだけのことだから。」
二人ともまだ若かった。町子は美人で、篠原と別れてもほかに拾う神がないわけではなかったが、家庭を破壊するだけの勇気はなかった。だから、篠原が同じ探偵小説愛好家でも刑事型であることがせめて不幸中の幸いだと思ってあきらめるよりほかなかった。

2

「篠原さん。」
ある日、本橋刑事がひょっこりオリオン座に姿を現わした。篠原は体を埋めていたソファの中からとび起きた。
「殺りましたね。」
「うむ。」
「ホシは?」
「いや。」
本橋刑事が首をふると、篠原は急に目を輝かせた。
「実は、それで、あんたのチエをかりにきたんだ。ちょっと、これから一緒に現場に行ってくれませんか?」
篠原はハンチングをつかむと、すぐ刑事のあとについて劇場を出た。二人肩を並べると篠原は刑事

よりもよほど背が低かった。
「強姦ですか？」
駅前の広い通りを歩きながら、篠原はきいた。
「いや、それらしい形跡はないんだ。風呂にはいっている最中を襲われて抵抗したものらしい。僕が駆けつけた時は、湯舟の中につかったまま、首をしめられて死んでいた。」
「誰か事情を知った者の仕業じゃありませんか？　被害者が一人で暮らしていることをよく知っている……。」
「一応そうも疑ってみた。しかし、タンスが下の段から二つばかりあいていた。」
シロウトの物盗りならタンスを上の方からあけて行くが、専門の泥棒はもう一度しめなおす手間をはぶくために、下の方からあけて行く。そうした細かい手口が警察の手がかりになるのである。
「物を盗られた形跡はあるのですか？」
「それはよくわからない。あの女はかなり金をためこんでいるという噂はあった。結婚後まもなく、亭主が兵隊にとられて南方へ行ってしまったので、その帰りを待っていた。あちらこちら探してみたが、現金は見当たらない。だから盗られているかもしれないし、われわれの気づかないところにかくしてあるのかもしれない。」
「すると、物を盗りにはいって、タンスをガタガタ言わせているのを女に気づかれた――と推測するわけですか？」
「女が騒いだので、風呂場へ駆けこんで女を絞め殺した。そう考えるのが一番順当なようだ。」
「しかし、本職の泥棒なら、騒がれたら、いそいで逃げだすのが本当でしょう？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com